

#### 第四章 真理をさとる

##### 一 さとりを開く

ゴータマ・ブツダはウルヴェーラーで、のちにブツダガヤー<sup>(1)</sup>と呼ばれる場所<sup>(2)</sup>で修行していたが、これはここで『アシヴァッタ樹 (asvattha Pali assattha, 無花果樹) の根もとでさとりを開いた (abhisambuddha)』<sup>(3)</sup>といわれる。<sup>(4)</sup>これは正覚 (abhisambodhi) と呼ばれるが、かれの生涯のうちで思想的にはもっとも重要な出来事である。

359  
ゴータマ・ブツダが菩提樹 (Bodhiyika, bodhiruma) のもとでさとりを完成してから、「鹿の園」における最初の説法を経て、王舎城を中心として初期の伝道を展開するにいたるまでの時期については、順次にその経過をしるした叙述が、次のようにもろもろの律蔵のうちに含まれている。

(一) パーリ文『律蔵』「マハーヴァツガ」(Vinaya-pitaka, Mahāvagga, I, 1-24. Text, vol. I, pp. 1-4. 南伝大蔵経、第三卷、一ページ―七九ページ)。

(二) 『四分律』第三二卷―第三三卷(大正蔵、二二卷、七七九ページ―七九九ページ、受戒毘度)。ここではシヤカ族の祖先にまでさかのぼって仏伝を述べている。

(三) 『五分律』第一五卷―第一六卷(大正蔵、二二卷、一〇一ページ―一〇二ページ)、受戒法。ここではシヤカ族の歴史にまでさかのぼって仏伝を述べている。

(四) なお律蔵には含まれていないが、『四衆経』(Catusparisatsutra 本書八ページ参照)がある。

これらの作品は、おそらく意識的に仏伝を編纂しようとしたのではなくて、出家して修行僧となるための受戒 (upasampada 受具足戒) の作法の成立したゆえんを説明するために、仏教なるものの成立した由来を述べ、『四分律』や『五分律』ならびに『根本説一切有部毘奈耶破僧事』ならびに相應チベット文ではさらに過去にさかのぼることがなされたのであろう。また成立年代は遅いが、同じ時期のゴータマ・ブツダのことが、『ジャータカ序』<sup>(5)</sup>に出ている。

ゴータマ・ブツダは菩提樹の下でさとりを開いたといわれているが、その樹木はじつはアシヴァツタ樹のことである。修行者が樹の下で樹の陰に蔽おほわれながら坐して修行するということは、インドでは古くから行なわれていて、原始仏教聖典にもしばしば言及されている。<sup>(6)</sup>とくにアシヴァツタ樹の<sup>(7)</sup>とで瞑想したということは、意味が深い。この樹はヒンディー語でもアシヴァツタと呼ばれるが、俗にヴァット (vat) ともいう。さらにサンスクリット語でピツバラ (pipala) と呼ばれ、<sup>(8)</sup>ヒンディー語

ではピーバル (pīval) というのも、実質的には同じである。(インド人の説明によると、ピツバラもニヤグロダ (Nyagrodha) も、ヴァットもバニヤンの一種であるとのことである。)

インドでは古来この樹ははとくに尊敬されていて、『アタルヴァ・ヴェーダ』<sup>(9)</sup>の古歌においても、「神々の住居」(devasādāna)であって、不死 (amita) を観察する場所であるとされている。「不死」とは天の不死の甘露を意味するが、また精神的な究極の境地をも意味する語である。この樹はウパニシヤツドや『バガヴァッド・ギーター』<sup>(10)</sup>、その他インドの諸文芸作品において、葉や根がひろがるという点で不思議な霊樹であると考えられた。だからゴータマ・ブツダがとくにこの場所を選んだということとは、仏教以前からあった民間信仰のこの伝承につながっているのである。そうしてゴータマ・ブツダがこの樹の下でさとりを開いたから、アシヴァツタ樹は俗に「菩提樹」(Bodhi-tree, Bo-tree)と呼ばれるようになった。「ドイツ語の教育を受けた日本人は、「菩提樹」とはリンデンバウム(Lindenbaum)<sup>(11)</sup>のことであると信じ、独和辞典にもそのように出ているが、それは別の樹木のことであるらしい。ドイツ人の編纂したサンスクリット辞典やヒンディー語辞典には Lindenbaum とどう訳は出ていない。」<sup>(12)</sup>この菩提樹が植物学的にいかなるものであるか、ということについては、次のように説明されている。

『仏典で問題とされる「菩提樹」とはインドボダイジュ (Ficus religiosa Linn. クワ科) のことである。

菩提樹と呼ばれている木にはいくつもある。日本の寺院などに菩提樹として植えられている木

は、中国原産のシナノキ科の樹木であり、釈迦がその木の下でさとりを開いたという本物の菩提樹（インドボダイジュ）とは別もので、緑の遠い植物である。インドボダイジュが温帯では育たないためか、または単にまぢがえられてか、中国ではこの木が菩提樹として寺内に植えられていたようだ。六条天皇のころ、宋に修行をした建仁寺の榮西がその種子を持ち帰り、寺の庭などに植えたのが最初だという。またシューベルトの歌曲で有名な菩提樹（Lindenbaum, リンデンバウム）は日本産のシナノキに非常によく似た欧州シナノキである。本来ならインドボダイジュがボダイジュという和名を得るべきだったのだろう。

インドボダイジュはイチジク属の半落葉高木で、葉は先が細長く伸びたハート形をしており、若いうちは葉面には光沢がある。イチジクに似た小さな果実は鳥の好物で、微細な種子は糞に混じって落ち、よく樹上や建物の上で芽を出している。幼木は生長とともに気根を伸ばし、やがてはその根で建物や木を縛りあげ、しめつけて破壊・枯死させる結果となるが、仏教と同様にヒンドゥー教でもこの木を聖木として崇め、人々はやたらにこの木を傷つけたり、抜いたりしない<sup>(13)</sup>。ともかく釈尊がこの樹の下でさとりを開いたということは、確実な事実であると考えられる。

釈尊の成道の日については、南方仏教の伝えによると『ヴァイシャーカ月の満月の日』と記されている。しかし釈尊の亡くなった日<sup>(15)</sup>も『ヴァイシャーカ月の満月の日』と記されている。これは太陽暦に直すと五月の満月の日にあたる。だから南方仏教諸国では五月のこの日に釈尊の誕生、成道、入滅をいっしょにこめて盛大に祝うのである。スリランカではこの日の祭をウエーサク（*Wesak*）祭と呼

んで、最大の祭となっている。

ところが、誕生も成道も入滅も同じ日に祝うということは、季節感がなくて、一様に熱い日のつづいている南方アジアの人々にとってはそれでよいであろうが、季節の移り変わりの激しい東アジア、シナ、日本の人々にはどうもしっくりしない。そこで、誕生と成道と入滅とを別々の日に祝うことにした。

ヴァイシャーカ月はインドの暦によると第二の月にあたるので、漢訳諸仏典では「二月八日」と記していることが多い<sup>(16)</sup>。シナの暦法はしばしば変わったが、周の暦法によると、陰暦の十一月を第一の月として数えるので、第二の月八日はつまり陰暦十二月八日となる。それを受けて日本では釈尊の成道を十二月八日に祝うことになったのである。

釈尊がさとりを開いた日時について、玄奘三蔵はいう。

『如来は印度のヴァイシャーカ（*Vaishāka*, 吠舎佉）月の後半八日に等正覚を開いた。この〔唐の〕三月八日に当たる。上座部ではヴァイシャーカ月の後半十五日に等正覚を成じたとする。この〔唐の〕三月十五日に当たる。この時、如来は年三十であった。或いは年三十五であったと言う。』（『大唐西域記』第八卷<sup>(17)</sup>）

古い伝説に従ってかれが二十九歳で出家し、七年修行したとすると、かれはそのとき三十六歳であったことになるし、やや遅い伝承に従って六年間修行したということに考えると、三十五歳であったということになる。ただこれは概数であり、細かなことはよくわからない。

ところで、さとりを実感したはずの人に対しても、なお悪魔がつきまわっていたということが「ジャータカ序」(vol. I, p. 78)に述べられている。ただし、このことについての伝説は他の所伝には見られないし、その内容も明らかに後世の付加である。

次いで悪魔の三人の娘が釈尊を誘惑しようとした話が伝えられている。

『そのとき、タンハー(妄執)、アラティイー(不快)、ラガー(貪欲)という悪魔の三人の娘たちが、「わたしたちの父が見えない。いったい、いまだどこにいるのかしら」と見まわしていたが、かれが落胆して地上に線を引きつけているのを見つけたので、父のもとへ行つて、

「お父さん、どうして苦しみ悩んでいるの」とたずねた。

「おまえたち、あの偉大な修行者はおれの力をしのでいるのだ。これだけの時間をかけて観察していたのに、あの人の過失を見出すことができなかった。だから、おれは苦しみ悩んでいるのだよ」

「もしそういうことなら、心配することはないわ。わたしたちがあの人をわたしたちの自由に連れてくるわ」

「おまえたち、あの方はだれの自由にもなりはしないよ。あの方は揺るぎない信念で動ずることはないのだ」

「お父さん、わたしたちは女ですよ。いますぐに、あの人を貪欲の罠などで縛りあげて連れてくるわ。あなたが心配することはありません」といって、世尊に近づき、

「修行者よ、あなたのお膝もとでわたしたちはお仕えしようございませう」といった。世尊はかの

女たちのことばに氣をとめられず、眼を開けて眺めることもされず、執着を完全に消滅して、こころが解脱し、独処の楽しみを享受しながらすわっておられた。すると、悪魔の娘たちは、

「男の人たちの好みはさまざまだわ。ある人たちは少女を好むし、ある人たちは年ごろの女、ある人たちは中年の女、ある人たちは年かさの女を好むのよ。わたしたちはいろいろな方法で誘惑してみたらいわ」と、各自が少女の姿などで、百人ずつ身体を作りだし、少女、まだお産をしたことのない女、一度お産をした女、二度お産をした女、中年の女、年をとった女となって、六回にわたって世尊に近づき、

「修行者よ、あなたのお膝もとでわたしたちはお仕えしようございませう」といった。それにも世尊は氣をとめられなかった。それは、執着を完全に消滅し解脱しておられたからである。(Tilaka, vol. I, pp. 78-79)

悪魔の三人の娘のことは、他の古い仏典にも出て<sup>(18)</sup>いる。ただここではいかにも具体的に述べられているのである。

ところで「ジャータカ序」編纂よりも以前に、悪魔の退散について、当時、真言密教的な解釈が行なわれていたことを、作者は知っていたがこの見解を排斥している。

『ところで、ある師僧たち (Kecid' eariyā) は、

「これらの年をとった女となって近づいてきたのを見て、世尊は、『これこのように、この者た

ちは、齒が抜け、髪が白くなれ」と呪われた」といつているが、これは採るべきではない。なぜなら、師がそのような呪詛をされることはないからである。(ibid. p. 79)

これに対して「ジャータカ序」作者は、伝統的保守的仏教の立場に立って、呪詛の説を排斥し、どこまでもブッダがすでに煩惱を断ち切っていたから魔女たちを排斥し得たのだということにしている。

『そこで、世尊は、

「消えうせよ。そなたたちはだれを見て、そのように努めているのか。そのようなことは、貪欲などを離れていない者の前でするのはよい。しかし、如来(仏)には、すでに貪欲がなく、憎悪がなく、迷妄がなくなってしまったのだ」といわれた。……かの女たちは、

「わたしたちの父が『この世で、聖者で〈幸ある者〉は、貪欲などでは容易に誘惑することができない』といったことは、本当のことだわ』などと云って、父のところへ帰った。(ibid. pp. 79-80)

ここで「ジャータカ序」はダンマパダの句を引用しているが、それは明らかに後世の付加である。

(1) Buddhagayā と書くのは、サンスクリット語およびパーリ語での発音である。現地では *ḍḍiḍḍa* と書いてあり、カニングガムの標記のごとく *Bodhgaya* (日本語の発音ではボドガヤ) と発音する。Buddhagaya という名称は、古代仏典にもサンスクリット文献にも出てこない。シナ巡礼僧も用いることなく、ただ「菩提樹のあるところ」として言及しているのみである。Siva という地名は古くからヒンドゥー教の霊場として文献に出ているが、それと区別して近年の人々がつくり出した名称なのである。

(2) Benimadhab Barua: *Gauṛ and Buddha-Gauṛ*. 2 vols. Calcutta: Indian Research Institute Publications, Indian History Series, No. 1, and Fine Arts Series, No. 4, 1934. [書評—A. K. Coomaras-

wamy, JAOS. vol. 57, 1937, pp. 191-193] ブッダガヤの視覚的表現としては、『ブッダガヤ』(WOB. p. 3)。『ブッダガヤ遺跡地図』(渡辺照宏『新釈尊伝』大法論叢一九六六年、p. 456)、『ブッダガヤを訪ねるアショカ王と王妃』サーンチー第一塔の東門『ブッダの世界』p. 347)、『菩提樹下の成道』前世紀・サーンチー『インド美術Ⅱ』p. 298)『WOB. p. 75, 76)『石彫』p. 30)『ガンダーラ・大英博物館蔵』『釈迦牟尼伝』p. 96)。

(3) [「おとりを開くた」という伝説] DN. vol. II, p. 52. Vinaya, Mahāvagga, I, 1, 1-7; Jataka, vol. I, p. 75, l. 1; Saṅghabhedavastu, Part I, pp. 117-119; CPS. S. 432-434; Dharmasāṅgī, p. 17; Visuddhi-maggā, XVII. 『長阿含経』第一巻、第一分初大本経第一(大正蔵、一巻、七ページ中—八ページ中)、『中阿含経』第二四巻、因品大因経第一(大正蔵、一巻、五七八ページ中—五八二ページ中)、『五分律』第一五巻、第三分初受戒法上(大正蔵、二二巻、一〇二ページ下—一〇三ページ上)、『四分律』第三一巻、受戒建度之一(大正蔵、二二巻、七八一ページ上—下)、『有部律破僧事』第五巻(大正蔵、二四巻、一二四ページ下)、『方广大莊嚴経』第九巻、成正覚品第二十二(大正蔵、三巻、五九五ページ上—五九七ページ上)、『普曜経』第六巻、行道禪思品第十九(大正蔵、三巻、五二一ページ下—五二四ページ下)、『瑞応本起経』下巻(大正蔵、三巻、四八〇ページ上—下)、『過去現在因果経』第三巻(大正蔵、三巻、六四二ページ上中)、『仏本行集経』第三〇巻、成無上道品第三十三(大正蔵、三巻、七九二ページ下—七九六ページ中)、『仏所行讚』第三巻、阿惟三菩提品第十四(大正蔵、四巻、二六ページ下—二八ページ上)。

図像的表現としては、『菩提樹におもむく』二〜四世紀・ガンダーラ・カルカッタ国立博物館蔵(WOB. p. 11-68)『菩提樹下の成道』前世紀・サーンチー『インド美術Ⅱ』p. 288)『WOB. p. 11-75, 76)『石彫』p. 21)『同』ガンダーラ・大英博物館蔵『釈迦牟尼伝』p. 96)『同』ボロブドゥール『彫像』p. 114)『釈尊の成道後、神々が釈尊を賛える』(Nagarj. p. 44, pl. IV)

(4) DN. vol. II, p. 52.

(5) Jataka, vol. I, p. 68 f. 諸種の「ジャータカ序」訳のほかは Henry Clarke Warren: *Buddhism in Tra-*

*nslation*, [Harvard Oriental Series, vol. 3], Cambridge, Mass., 1896, pp. 71-83 に英訳されている。

(9) H. Oldenberg: *Buddha*, S. 105, Ann. 1:2.

(10) M. B. Emeneau: "The Strangling Figs in Sanskrit Literature" *University of California Publications in Classical Philology*, vol. XIII, 1949, No. 10, p. 345f. Cf. *Katha-Up. asvatha* は萩原雲来『梵和辞典』には' 聖無花果樹 [菩提樹] 学名' *Ficus religiosa* とあり、漢訳名として' 吉祥樹、吉安(林) (*Buddhacaria*)' 音写として' 阿訶他 (*Lalharistara*)' とある。

キヒホル・ウイリアムズ大辞典には' the holy fig tree, *Ficus religiosa* として' 出典は *AV.*; *Sat. Br.* などをあげている。アプテの辞書には、

1. The holy fig tree (Marāṭhi: pīmpā):

2. A kind of the āsvatha tree (gandvirika; Marāṭhi: jākhi pīmpāri) である。

3. Name of another tree, *gardabhāṇḍa* (Marāṭhi: jākhi pīmpāri) である。

(a) ある樹木の名、*Ficus religiosa* L., それは神聖だと見なされ、とくに仏教徒のあいだでは特別の崇拜の対象となっている。なんとすればシャーキヤムニはそのようなある樹の下に現世的なものを捨て去ったからである。この樹は他の諸の樹の割れ目のうちに根を張り、壁や家の割れ目にも根を張って、それらを破壊させる。[出典としては『リツ・ヴェーダ』一〇・九七・五などをあげている。] この語のペーリ語形は *asatha* であるが、ペーリ聖典協会の辞書には' the holy fig-tree, *Ficus religiosa*: the tree under which the Buddha attained enlightenment, i. e. the Bo tree. として' 出典として' *Vinaya*, IV, 35; *DN*. II. 4 (*sammā-sambuddho assathassa mūle abhisambuddho*): *SN*. V. 96 などあげている。その語源としては多々の辞典に「馬が立つているところ」と説明されているが、ペーリ聖典協会の辞書はそれを疑問視して、むしろその地方の方言から採用されたものだと述べているが、わたくしは後者の意見に賛成である。わたくしはブツダカヤの菩提樹を夏にも冬にも見たことがあつたが、季節的な落葉もせず、メキメキしい緑色を示していた。

(8) 現代のインド人は一般に、菩提樹はビツパラ樹のことであると説明しているし、また、インド学者は一般にこの語をビツパラ樹と同一視しているが、その点は前掲の辞書でも、マラーティー語からの用例を見ても確かめられる。『壹月全集』四一〇ページ以下参照。

(9) *AV*. V, 4; VI, 95; XIX, 39. Cf. H. Beekh: *Buddhismus*, I. 3 Auf. Sammlung Götschen, Berlin und Leipzig, 1928, S. 86; H. Oldenberg: *Buddha*, S. 127, Ann. 1.

(10) 詳しうは' *H. M. B. Emeneau* の前掲論文参照。

(11) *The New Cassell's German Dictionary* には die Linde は lime-tree としてある。

(12) *Aryendra Sharma-Hans J. Vermeer: Hindi-Deutsches Wörterbuch* (Heidelberg: Julius Groos Verlag, 1983) には' *āsvatha* の説明はなして' Pipal の *asvat* として *Indischer Feigenbaum*, Götzenbaum, Asvatha, Bo, Bodhi, Pipal, Pappelfeigenbaum (*Ficus religiosa*) と説明している。他方 *vat* は *Banyanbaum* (*Ficus bengalensis/indica*) と説明している。R. C. Pathak: *Bhargava's Standard Illustrated Dictionary*, 7th ed. には *āsvatha* は the pipal tree, the holy fig (*Ficus religiosa*), pipar, pipal は the holy fig tree, long pepper と説明している。

(13) 中村元編著『仏教植物散策』(東京書籍、一九八六年一〇月)五五ページにおける西岡直樹氏の解説にも *asvat*。

(14) *Mahāvamsa* I, 12.

(15) *Mahāvamsa* III, 2.

(16) ただし『爾時菩薩、以慈悲力、於二月七日夜、降伏魔、已、放大光明。』(『過去現在因果経』第三卷、大正藏、三卷、六四一ページ中)。

(17) 大正藏、五一卷、九一六ページ中。

(18) 本書三〇六一—三二二ページ参照。